

演說部報

内容充實に盡力したると叫んで、前年度の部員は去りき。吾れはそもその云ふ所の内容充實とは何ぞと云ふ事を考へたる結果、我が演說部は、龍南の權威者たるべき使命を有すてふ信念を抱くに至れり。權威者然り。權威者、如何に雄々しの言葉に非ずや。寸分の邪惡をも斬つて棄てんとする正義者の憧憬して措く能はざるものに非ずや。由來演說は遊戯に非ず。放談高論以て得とし、能とすべきものに非ずして、正義の把持者にして、且つ、渾沌の世に一道の光明を投射するものに外ならず。故に、我が部は意氣の人、氣骨の人を愛し、辯、達せりと雖も、奮闘的精神に缺げ、固陋的手段を弄する者を惡む。之れ他なし、即ち前者は正義の劍を把り、猛然として進み得るの人たるが爲めにして、後者は正義そのものを破壊し、權威の擁護に任ずる能はざるが爲めなり。近來、龍

南の氣風廢頹し、思想動きて、その方向定め難く爲めに健兒の意氣や揚らずと云ふ聲を聞く。巷間の言信を措くに足らずと雖も、又以て他山の石となすべし。而して翻つて、今一度龍南の空氣を精細に考察し、批判する所あれ。龍南の天地大盤石の如しと觀するを許さば、又幸の極なり。不幸、吾れは、反對の決論に到達せざるを得ざるを悲む。吾れもとよむ舊態を固執し、古習を墨守せん事を主張する者に非ずして、寧ろ、明治と大正との世に、世界並びに日本全局に、霄壤の差を確認し、従つて、又、吾人青年學徒の責務、決心に更に重きを加へたるを自覺するが故に、新使命を果すべき氣風を求め、適切なる空氣を呼吸せん事を切に欲するものなり。而もこの欲求にして止む能はざるが爲めに、龍南の現在に容易に、樂觀する事を得ざるものなり。吾等が先輩と俱に唯一のモットーとなしたる剛毅朴訥は、歳々年々反覆せられて教へられたるものたらずんば非ず而もその意味に於いて、各自に異なる見解を有するを信ず。然れ共、亦、その間不變不易なる共通點あるを信ず。否あるべきなり。而して、それこそ眞面

目の語を以て換言せらるべきものたらざるべからず諸君、龍南の問題は、之れを要せば、この眞面目が龍南の現實に於いて如何の問題に過ぎずして何ぞや巷間の言たると、内、憤慨措く能はずして、剛毅を高唱する言たるとを問はず、この事を批判し云々するに外ならざるなり。風治まれるの時天地間一見寂莫なるの觀あり。而して風動くの時燥然たるものあり。龍南の空氣今日果して如何ぞや。巷間の言は、豈唯に吾人を強ゆるの言のみに非らざるべし。慨嘆の聲は、眞面目の如何なる状態にあるやを、自ら表明するものに非ずして何ぞや。

今や龍南の空氣動けりと云ふ。果して然らば諸君起つて我部に來れ。彼邪の劍は諸君の使用を待てるや久し。不正を壓伏するの權威は、壇上に起つ人のものたるべし。好漢龍南の指導者たらんとせば、來つて罵倒すべきものを罵倒し去れ。光明を與へんとせば、健兒の肺臍を刺して以つて、其鳴せしめよ。再言す。我が部は意氣の人氣骨の人即ち眞劍の人を愛す。辯の如何はその問ふ所に非ず。訥辯可なり。雄辯更に可なり。唯心中一點白熱せるものだに有する

あらば、熱辯自ら成り、鬼神も動く可く、かの口舌滔々の辯の如きは婦女子の泣言より何等の優れるあるを見ず。諸君、意氣の人たれ、意氣の人たれ。而して壇上堂々男子の本懷を獅子吼せよ。白熱せるその胸襟を開いて絶叫せよ。

不肖等この部の大任を負ふの榮譽を與へられしと雖も、不肖非才、何等の爲すなく、思ふ所、云ふ所而して行ふ所と、大いに差異を生じ、今にして、その貴の大なるに戰慄して、出づる所を失ふ。今や新陳代謝せんとするに際して、大に爲す有る幾多の戰士を迎へ得たるを衷心より喜ぶと共に、その龍南の爲めに健闘を祈るや切なり。濟々の士自重する所あれ。

龍南の論客中、その人ありと知られたる大野舍君は、病みて、遂に復た起つ能はず。昨年十二月鬼籍の人となれり。吾人の嚮望、哀しくも水泡に歸し、龍南の不幸なると共に我が部の不幸中の不幸事たらずんば非ず。君が明快にして縦横の論、侃々暢達の辯今や聽くによしなし。吁悼しい哉。

部員一同こゝに謹みを深くして君が冥福を祈る。

第四回龍嶺怒號會

雄辯は、人の魂の舞踏である。演壇は舞踏場である、この意味に於いて、雄辯は人生最高の藝術である。少くともそれ等のもの、一である。實にや、品格を根底し、思索と態度とをその主要の要素と數ふるものである。そして吾人が外面的に練磨し得べきものは、品格と思索とを如何なる形式に、如何なる態度によりて發表するかの問題であり、如何にして尙一層その發表の効果を有効ならしめ得るかの問題である。我が怒號會もこの意味に於いて創設せられ、繼續せられて來たのである。

吾人もこの必要によりて、第四會の怒號會を一月十五日より一週間龍田山嶺に開催することにした。賛同の諸君、初日に於いて三十五名を數へ得たのは甚だ盛大と云ふを得ないが、又健兒の意氣や見るべきである。或ひは山嶺に於いて、蘇山蒙々の噴煙を見て、蠻聲を熱叫し、或ひは山谷に在りて、木魂と聲を響せて、デモステネスを氣取られし人もあつたのである。通計六日、長くはないが、その各自得られ

た所は多大なるものがあると信ずる。その態度を持って、諸君が得意の壇上に立つて、熱辯を振ふの時、人は驚異の眼を見張るであらう。不幸、天候甚だ不順、全部の皆勤者を見るを得なかつたのを大いに遺憾とする。

最終の日、紀念撮影をなし、山腹に於いて、五分間演說會を開く。名實並び存し盛大、十分の快哉を叫びて散會。皆勤者として記念品を呈したる氏名左の如し。

弘中 政男君	野口 正造君	森 正雄君
山田 鴻一郎君	三枝 博音君	林 繁造君
石津 武彦君	井手 實雄君	木田 弘人君
荒卷 昌之君	鈴木 壽男君	小山田 小七君

例 會

こゝに乾坤一轉して、陽春とは云へど降雪紛々、天候險惡たるものあり。然れども龍南健兒の意氣や更に舉り、默せんとして能はず、遂に發して、瑞邦館内一時に、百花を開くの觀あり。二月二十五日午後三時開會の辭に次いで、壇上の人となれるは、

一、生命の琴線 一、二、甲一 鹽谷安喜君

先づ長臙を提げて登壇、龍南を論じ、天下を論ぜんとする前に汝自らを論ぜよ、と喝破して、その思案の人たるを忍ばしむ、

吾人は現實界を離れ得ずとも、その流れの中にありて天國を見るを得る。これによつて以つて、眞の生活の道程に上るを得べしと云ひ、生命の琴線にふれて行く生活には、大なる新鮮なる泉あり、光あり、面して絶大なる悦樂ありと云ひて、吾人人生の目的は、生命そのものと合致するに在るを高唱し、トルストイの人生は幸福への努力なりとの一句を引証して、その所論を固め、最後に生命の琴線を、奏でつつ、足ふみ鳴らして堂々、吾人の道程を進行せんと、あくまで、進む可きの道を指示して降壇。

二、男子の意氣

一、二、丙 渡邊 潮君

男子でなければならぬと云ふ事を、ローマンチックに叫ばむとは、開口の辞なりしが、一世の木鐸たるべき學生が、怠惰なりと、俗人に見らるるは憤慨の至りなりとて、ローマンチックを男子の意氣に變じ更に、悪事を爲すが、學生々活それよりも重大ならば、君の帽子を、先づ擲つてやり給へとて、憤慨の痛棒を、くらはし、不透徹なる男は、男にして、男に非ずとて、痛罵、完膚なからしむ。吾人は君にして、始めて戰慄的快感を覺ゆ。君よ強めよや。技亦圓熟。

三、時艱にして虞翁を忍ぶ 一、三、甲 野口正造君

着中一點の紅花たる彼を、今日の國家内外多事の時に思はざるを得ずとて、殊序整然縷々として、虞翁の、事蹟を説き、サルスペリーの評語を借りて、彼れを讚美するにあたり、君の面目躍如たり。惜むらば短時間の演説には材料の撰擇更に百尺竿頭一步の感あり、今

や君我が論壇を去らん、好漢自重せよ。

四、龍南の問題剛毅朴訥 一、二、乙 三枝博音君

この君にしてこの題、吾人の最も聽かんと欲するものなり。莊重の言、先づ樗牛氏の言を引ききて曰く、諸君よく願よ、現實の世界より出立せるに拘はらず、抽象化して、而も之れを弄びつ、あるに非ずやと。更に剛毅今尙取るべきか棄て去るべきか、これ卑近にして、且つ重大なる問題なりとて、聽衆の面前に迫り、世界の思想界を瞥見して、日本の思想界に歸り之れにメスを加ふ。漸くにして論鋒愈なり。抑々剛毅朴訥とは、燥急ならず、輕薄ならず、よゝ加減に見切をせず、何處何處でも透徹的の生活なり。この生活あるが爲めに吾人は強者たり。吾人の前途光明あるに非ずや。今や龍南の天地を去らんとする、剛毅を捕へよ。而して、更に充實せる内容と、新しき形式とを附し以つて、八百健兒のモットーたらしめよ、と。論及し自覺の必要を暗示して、降壇。吾人の所論に合致して、人の肺腑を刺すの概あり吁意氣の人、我が演説部にこの人あり。

五、五分間

一、三、甲 堤 正造君

最後の五分間に於いて、君の怒號會五分間演説中誤謬ありたれば訂正すまで登壇。諸君は何が爲めに、そこにありやとて、局外者の態度を容易に許さざるの言を以つて、衆目を集め生命は、現在にあり、人生は現在そのものの努力に外ならず、現在に生きよ、現在の動物たれと極論す。

かくて盛大なるこの會を拍手裡に閉づ。(小山田小七妄言再謝)

劍道部報

◎京都遠征記

羽檄幾度か飛んで大正五年の歳末は行雲甚だ急なるものあり。選手の姓名發表せられ、第一學期試験は終了し、二旬に余る合宿は解散し愈々十二月二十五日晚冬の寒風肌を劈く朝、茲に劍道の戰士拾貳名遠征の準備全くなりて鶴田師範引率の下に、必勝を期して京洛遠征の途に就く。午前六時上熊本にて江部劍道部長代理、佐木々綠俱部幹事、其の他熊本武道家の盛んなる見送りを受け萬歳聲裡に汽車は黒煙を殘して東に走る。驛々此の行を壯にする學友は「しつかりやれ」と激勵を與ふ。戰士の顔には既に決心の色漂へるを見る。

河峽の夜は風いたく冷やかにして、黎明の中國の景致は白霜に綴られて、緊縮せる感知、何となく戰士の胸に適合せるを覺ゆ。三田尻にて獨法の快男子猶原氏の迎ふるあり、吾人は益々意を強うす。

長途の車中の困難も廿六日午前八時過ぎには洛陽の人となりて全く忘れられ鐵腕の熱血高鳴して氣大に

昇る。

九條驛にて東大武藤、曾布川、石坂、京大大野、九野、柔弓兩部の委員諸兄に迎ゑられ、疏水道北村旅館につく。

京都帝國大學主催

第四回劍道大會日程

◎十二月二十八日午前九時開始

第一回 岡山醫專——三 高

第二回 七 高——四 高

第三回 六 高——大坂高工

第四回 神戸高商——五 高

右試合終了後紀念寫眞撮影シ後學生集合所ニ於テ審判員付添人及選手一同ト懇親茶話會開カレタリ。

◎十二月廿九日午前九時開始。

第一回 五 高——京都醫專

第二回 大阪高工——神戸高商

第三回 三 高——七 高

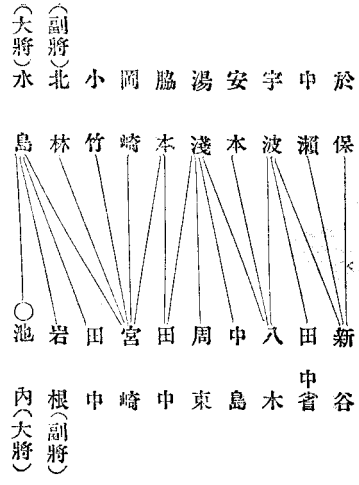
第四回 京都醫專——岡山醫專

◎十二月卅日午前九時ヨリ優勝試合舉行、

劍道戰記

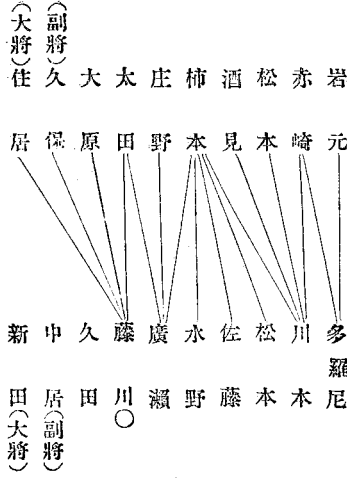
(一)岡山醫專對三高戰陪觀

(岡山醫專) (三)高

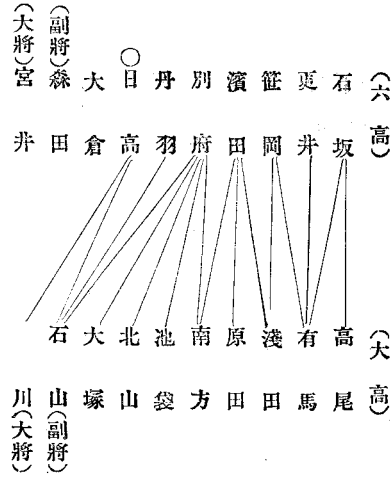


(二)七高對四高戰陪觀

(七)高 (四)高



(三)六高對大坂高工戰陪觀 (六)高



○優勝旗返還式

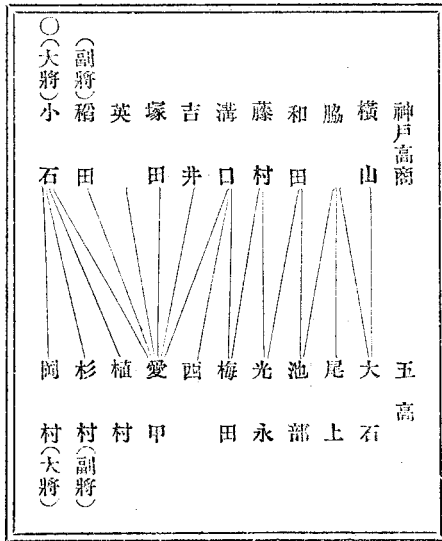
十二月廿八日午後三時頃六高對大高の勝負決するや、大學道場に於て五高選手一同整列、會長、諸審判官着席、後、紫影遙々たる優勝旗は五高岡村委員の手より會長荒木寅三郎先生の手に渡されたり。

(四)神戸高商對五高戰

十二月二十八日 起き出づれば一夜紛囂天より降り、京洛の天地は白雪皚々、轡蹄連山玉瑤を彫めて今日の戰鬪の背景を美しく飾れるに非ずや。あゝ雪！義徒の壯烈櫻田門外の血、皆それ雪を得て一層の光彩を放てるものと謂ふべし。今日は昨年參憐の死を遂げた、神戸高商と仇敵五高軍との決戦日也。大學道場にて四時より開始す。窓外六花紛亂せるありて天目ために薄暗く、場内肅殺の氣漲りて觀

衆今唾を呑んで形勢を見る。

審判官 大學師範 内藤高治先生
京醫師範 門奈 正先生



(短評は紙數多大なれば次號に譲る)

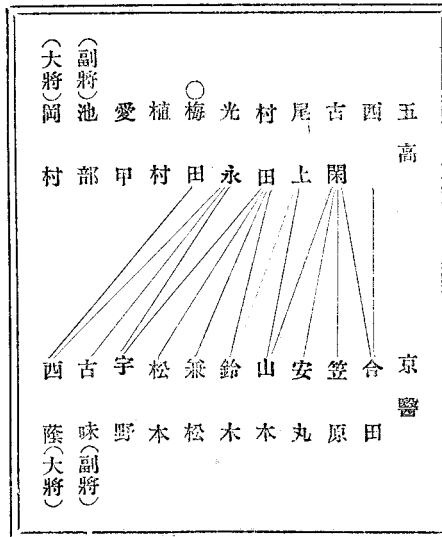
(五)五高對京都醫專戰

十二月廿九日 最早や運命の神に棄てられた我軍は今日の戦は何
等戦の氣分もせず稽古の積りで遺恨多き昨の戦場に望む時早や十時
に垂んとせり。

積雪尺余、大石、杉村に代ふるに昨の不戦者、古閑、村田を以てし

た。

審判官 四高師範 堀 正平先生
大學師範 内藤高治先生



◇盛んなる哉我が劍道部

由來熊本は尙武の地なり。今や吾が龍南武道の粹
集つて一團をなす。外敵到るも何かあらん。而して
吾が劍道部先きに三回中二回迄優勝旗を得、神戸高
商、三高、七高を破りて覇を握るに精兵未だ盡きざ
るを以てす。

不幸本年神戸高商をして空しく名をなさしめたりとは云へ實力に於ては觀衆一般の認むる處、神商對五高戦は大將大將の大會決に及んだが、三高四高は各々四五名の不戦者を殘さしめて神商に敗けた。遂に神商優勝旗を得た、是を以て是を見れば我校の不覺以て恥するに足らず「五高は實力の敗けにあらず、どうも仕方がない」とは觀衆一般我が校に對する同情の聲なりき。

從來無冠の丈夫を以て有級者以上の者を多く有せしは吾人の誇りしところ。加之、今や、吾が部は和田野田、宮脇の各道場の皆傳、目錄を有する者十數名を數るは以て我が部の光榮とする處なり。左に記して以て史に残さん。

免許皆傳 西 隆 岡村賛二 (和田道場)
全 全 植村 繁 梅田 生 (宮脇道場)

◆寒稽古終了式

狂舞、蠻歌、牛飲、或時は達磨の如き默想に耽る五高魂の發露たる劍道寒稽古も寮閉鎖以來數年間、午後の稽古となり、頗る不振嘗て隆盛なりし往古の影

だになかりしが、茲に舊新兩委員相結束し教務課との交渉を行ひ、龍南劍道再興策として一月廿九日より二月十一日まで二週間毎朝午前六時より七時に至る猛烈なる稽古を行ひ、愈々十一日紀元節の佳節をトして終了式を行ひたり。

當日式後直ちに一本勝負の紅白勝負を行ひ、小松教頭、江部劍道部長、堀生徒監督等の出席ありて盛大なりき。

皆勤者姓名左の如し。

今吉 敏雄、山口 弘、永野 若松、島浦 精一、吉富 謙治
廣田 幸三、佐藤 武男、伊藤 正作、岡 林平、宮崎 繁
高尾 甚藏、井上 馨、佐伯 俊三、瀬戸 致格、大川 早
緒方 義夫、井上 邦雄、古閑 龜雄、松尾喜代司、谷口 止
椎葉 亂民、笠 達憲、石井 傳弘、古賀 經美、早田宮太郎
齊藤 謙介、駕海 政彦、内田西八郎、瀧原 敏、森 重太郎
平川 信壽、

以上三十一名、 (六一三一、委員投)

柔道部報

京都遠征記

暗雲空を蔽ひ風蕭々として健兒起つべきの機は來りぬ。思へば涙を呑んで洛陽の人士に再會を約して早や一年この間果して龍南柔道部は何をなしたるか、敗軍の將兵を語らず。辞を收め言を抑へて寒暑に怯まず、只起てば投ぐべきを思ひ、寢れば抑ふべきを思ふ。恨むべきも亦敬すべきは六高、勵むべきは我等。時として日没時の光を浴びし事も稀ならざりき。曆旦再度廻つて遂に雪辱の時は來れり。多くの期待と獎勵の辞を後にして十二月廿四日、朝愈よ京都に向ふ。一行師範を加へて十八名、車中の話として勝負の事ならざるなし、かくて關門の鷗に送られ意氣旺盛翌二十五日午後三時過ぎ京都驛に着。福島四段、村上、野田兩三段を初め、在京熊本縣人、先輩に圍繞されて、挨拶もそこ／＼に平安中學に入り早速稽古をなす。元氣あり、意氣冲天の如し。一通り稽古をなして北村旅館に入る。昨年の宿なり。

一月廿六日大學の招待會に行く市村博士(二段)曰

く諸君は正々堂々たれ柔道なれ柔術をなすなど先づ警告を與へて後ち己が洋行談に移り日本議會に柔道の必要を盛に論せらる、各校挨拶をなして分る。

一月廿七日、幕は切つて落されたり。爲すべきの時は來りぬ。先づ本校對山口高商

徳重對和田、徳重は近時元氣無双方あり技あり膽あり先鋒を承つて先づ敵を跳腰に飛ばす。徳重對北條。彼一氣に北條を衝き体落しにドット落す。徳重對中村。二人を屠りし彼は意氣天をつく中村又ここを詮度と戦ふ。互に戦ふ事數合なりしか時來りて引分、五高軍先づ、陣容大に整ふの觀あり。佐々木榮對舟木、佐々木舟木と目覺しき合戦をなし引分となる。朝川對水原。巨漢朝川は我柔道部に最も未來を囑せらるる者なり。熱心又驚くべきものあり水原不堪、受身となりしが能く禦ぎて引分となる。龜谷對恒富。龜谷出合頭に巧妙なる釣込足にて業を取りしが敵もさるもの直ちに癡て起たず遂に絞業に出でられて敗陣を引く。佐々木對恒富、温厚の君子、熱心の人佐々木は恒富の寢業に應戦せしが、引分となる。松井對松永、松永は最初より寢業に來り松井絞業にかかる。吉岡對松永、中學同窓の故を以て松永おちて又起たず吉岡怒れども如何ともする能はず引分となる。五高軍對山口軍此處に平衡となる。小本對林勝負運悪き小本君は林に勝を興へて退く。橋村對林。橋村君のキビ／＼せる勝負振りは林を抑へて小本の仇を取る。橋村餘燭をもて橋口に當り力の入れる勝負なりしが引分となる。山田對水越初段。水越丈あり力あり技は右左の跳腰足業の利業あり山田は段外なれどもその早業その自由

なる活動振りは定評あり。水越立つて右左に盛に攻め来る、山田亦之に應戦せしが遂に跳腰の犠牲となる。廣辻對水越初段、廣辻はその体の柔的なる、怪物の觀あり、水越の自由なる働振り、大突撃も未だこの堅塞をつくべからず危険の如くにして危険ならざる廣辻の巧妙なる体のこなし方にあきれつつある中引分となる。田中省二段對山田。山田は猫の如く這ふて來り、寝てたらず人は遂に獸の餌となりて絞業に敗る。ああ危機は來れり我軍軍容いご振はず。田中敏初段對山田初段、山田這ひて起たず田中初段の廢業も功を奏せず引分となる。ああ遂に二人の真越あり只頼むべきは大將と副將なり副將菅 づ。菅二段對種子島初段、菅二段亦決心の勇あり、機を見てエイの跳腰に種子島を飛ばす。菅二段對平野二段。平野は講道館幼年組の出。業師にて有名なり出でて大に戦ひしが菅二段の跳腰に又陣を引く。菅二段對阿部二段、阿部は山口の大將なり、位置は副將に居れど大將小松崎初段は後備軍なり阿部足拂に業を取る菅更に猛然立ちて返業に業を取りしが前二者の爲めに疲色ありて戰鬪意の如くならず遂に足業の業二本合して一本となり涙を呑んで陣を引く。有田二段對阿部二段足業同士の好對戰、されど阿部の業や早かりけん争ふ間もなく足拂に有田軍容を退きあはれ我校の敗となる。あ、脆くも敗れしかな。來年を期せしも仇となりしか、涙は滾々として湧きてつきす、鴨川の水の如く返らぬ事とは云へ苦心の水泡に歸せしを恨むのみ銀雪の洛都も敗軍の將には見ねで只落つる涙と共に空ゆく鳥に敗報を通せしむるのみ、あゝ再び敗軍の將と

なりしか。

六高對四高の勝負は五高に對する山口の比にあらで言辭に絶せり擊劍道場に走り逃ぐるあり鬼ごつこあり、眞に柔道にあらずして、優勝旗獲得術なり。愛校心可なり、愛部心可なり。されど人を傷け道を脱れ優勝旗の爲めに總てを犠牲にするは功利心以外にそも何をかするものぞ。

十二月廿八日

六高對五高、敵は這うて寝るより外に知らざりき。その態度その心事の武道を外ることも關する所にあらざりき。目的の前には手段を撰ばざる彼等の醜さよ。我等は師範に教はり、先生に習ひし柔道に勝負の二字の概念を浮べて戦ふのみ。勝負既に明かなり。

佐々木義對木原寝て立たず引分。朝川對渡邊全じく引分。佐々木榮對橋全じく引分。山崎對近藤全じく引分。龜谷對島尾、島尾初めて起つや龜谷の足拂返しの猛襲に二たまりなし。龜谷對受川、受川又起たず功妙なる廢業に龜谷退く。吉岡對受川吉岡又も蛇の餌となる。小本對受川、小木の長軀又蛇に締められて退く。徳重對受川徳重と受川誠に見事なる戰振なりしか徳重の抑へ込み返されて敗る。橋村對受川、怪物受川も橋村の老巧なるに適はず見事壓へられて敗陣、橋村對菊池、菊池起ち来るや橋村の跳腰に見事かかり敗陣を引

く」橋村對平山、橋村疲勞加はりて惜しき所に敗しぬ」山田對平山、山田のキビキビしたやりに平山やや後れを取り足拂に敗陣」山田對松本松本の抑込はシリシリ山田を攻めて山田惜しき敗をさる」廣辻對松本怪物廣辻は出づ老獪と謂はんか熟練と謂はんか防戦入神の觀ありとは彼が事なり敵は廣辻の術中に入り抑込一本ならんと思し時十分の餘は鳴る吳々も惜しかりし」田中對濱田、田中脚氣を病みてやや元氣衰へし觀あり濱田と戦ふ中如何なる機にか跳腰に飛びされぬ」田中敏對濱田田中敏猛然なる大内刈に一襲し去る」田中敏對秋山、秋山寢て動かす絞業きまりて一本」管對秋山管は涙を流し一つ戦へりされど秋山如何としても起たす管は離れて機を見んとすかくして十五分敵に御辭儀をさせしのみにて戦ふの間一分だになし、あゝ敵はかくの如き心事か、武士ならば太刀振つて首膺處を一にせざるべし」有田對武藤初段、武藤起つや一蹴し去らる」有田對山成初段、山成又寢て動かす引分となる。

あゝ我等は再び敗れたるか、一度は優勝旗をと誓ひし我等が、只正々堂々の四字を口善悪なき京童の口に殘して去らざるべからざるか。會田四段東京より來りて京都の試合は特別だとの慰言を與へられしを未だしもの言として歸らざるべきか、あゝ、されど乞ふ讀者京都の試合は特別なり、柔道にあらず。カニ式四つ這ひ式にして吾人がせめてかゝる柔道を知りもし習はざりしを喜ぶのみ。只終りに京大柔道部

に大覺醒を與へ五高の堂々しさによつて來年より審判規定を全然改むる旨誓はしめしは只いさゝか心を安うする所以なり。所詮今回の如き柔道を以てしては勝つべからず優者は柔術柔道の優者にあらず、四つ這式カニ式優者たるのみ。眞正勝負には何の價値あるなし。

柔道部昇段

田中敏三初段は今回二段に特に進歩の跡著しきの故を以て昇段。廣辻信吉、山田勝清兩氏は初段に昇段共に我部の喜ぶべき事なり。(鐵船)

柔道部寒稽古納會

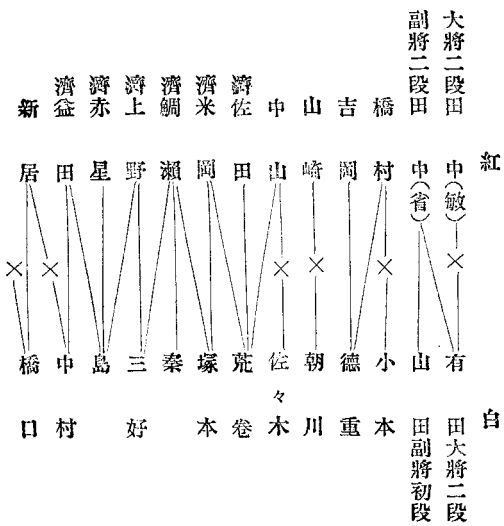
一月二十四日より二月十一日まで二週間寒稽古を行つた。例年放課後やつて居たがそれでは寒稽古の主意に悖るといふところから本年は毎日午前六時から七時半までの朝稽古とした。それにも係らず左記六十八名の例年に倍する皆勤者を得たのは確に在寮諸君の大奮發に負ふところ少からずと信する。

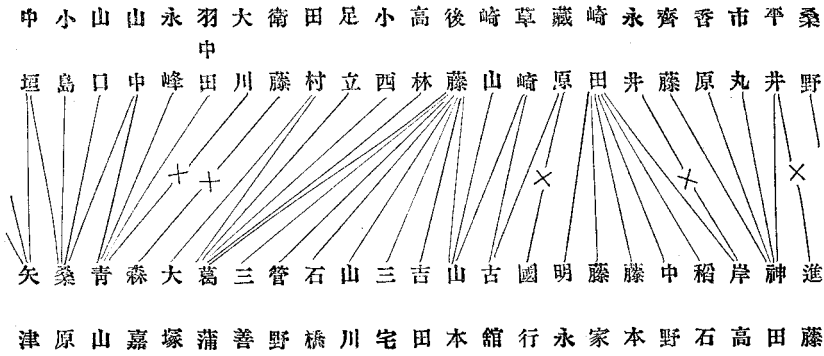
二月十一日紀元の佳節を卜して午後の一時からその納會を舉行し盛大なる紅白勝負を行つた。當日勝負

に参加したる者約八十名他に濟々疊の親分株六名の飛入があつて一層壯快なる決戦の幕が切り放たれた例により左に短評を。

若武者の近藤と横藤とが先鋒の火蓋を切つてから一進一退五角の勢力を持して行つたが白軍天津築原青山力戰漸次に敵を壓迫し大に奮ふ。紅軍の勇士輕快至極の後藤或は釣込足或は大外刈と瞬く間に七人の大男を投げ飛ばして一舉頽勢を挽回したのは何と云つても當日第一の殊勳者であつた。ついで紅軍の崎田巧に敵將五名を葬れば紅軍神田奮然として立ち見事に雪辱の任を果す。白軍の島元氣充滿得意の横捨身に濟々疊の花形益田赤星を倒せば綱瀬出でて鳥三好泰の首級を取る。白軍荒牧は明善中學時代に於て文武兩道の典型と稱せられた理想的の柔道家悠々追らず米岡を宙に飛ばし濟々疊の御大將敗けん氣と元氣で出来た快漢佐多を刈り倒せば中山出でて荒牧を敗退せしめ察の御大佐々木と引分た。巨漢朝川關一舉に抑へ込まんとあせれ共山崎の堅塞陥らず白軍徳重駒を進めて得意の体落に真向から斬つてかかれば紅軍吉岡跳腰の秘法を盡ししばし混戦徳重の体落し見事奏功して橋村に對した。橋村は京都遠征第一の功勞者ホートもやれば柔道もやるといふ豪の者徳重の腕を取つた手際は巧妙と云はねばならん。白軍小本立業に進めば橋村寢業を利して終に引分。兩軍五角愈最後の五分間となつた。白軍の副將新進の初段龍南運動界の怪物山田奮に進めば紅軍の副將老巧の二段体軀堂々の田中(省)決然として立ち兩虎相搏つ事暫時山田の足拂巧なく田中の跳腰亦巧を奏せなかつたが終に山田は上四方に抑へられ滿身の力を以て回復

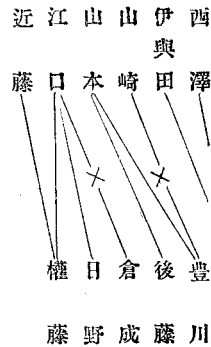
大に務めたけれど惜哉時已に遅く勝利の月桂冠は田中の手に落つた白軍の大將其名も高き有田二段は一舉田中を上四方に抑へ込み。進む紅軍の大將田中(敏)二段と對陣して大將同志の決戦となつた。一方は二部を代表した立業の達人一方は一部を脊負つた寢業の名人。手に汗を握つて觀る中に田中の飛込んだ大内刈の早き流石の有田も急を喰つて落ちたが体をひねつて之をさけたさらば有田の攻めつけた大外刈の一彈田中の体は倒れたが巧に避けて勝負決せず終に引分の鈴令はなつたのである。かくして當日の試合は勇壯の裡に終つた。





勝負終了後校長より一場の訓話があつて續いて左記
 皆勤者にメタル券を授與された

- 一ヶ年皆勤者
- 荒牧 昌之
 - 江口虎三郎
 - 豊村 政男
 - 菅野 寛一
 - 藤家 徳松
 - 古館 尙也
 - 吉田 誠
 - 足立 一郎
 - 大崎 唯一
 - 永井 三郎
 - 伊興田光男
 - 豊川 善貴
 - 森 嘉重
 - 西澤 光
 - 新居源太郎
 - 倉成敬二郎
 - 神田 重藏
 - 長峰 正次
 - 崎山参一郎
 - 山本喜代藏
 - 小西 貫一
 - 山川 信吉
 - 田村 和平
 - 後藤 文雄
 - 山崎 山崎
 - 山口 真哉
 - 中垣 保
 - 衛藤 恒彦
 - 石橋 信夫
 - 泰 誠之
 - 日野 壽一
 - 中野 益利
 - 橋口 義夫
 - 後藤 博
 - 三宅定次郎
 - 島 一郎
 - 稲石洋一郎
 - 桑野 豊介
 - 矢津 浩
 - 大塚 登
 - 香原三樹次
 - 大川 昇
 - 近藤 貫一
 - 草崎 貫一
 - 權藤 竹藏
 - 羽中田喜代作
 - 崎田 義雄
 - 高林 傳男
 - 桑原 五郎
 - 國行 榮次
 - 徳重 英助
 - 進藤 龍馬
 - 山本準次郎
 - 小島 鎮天
 - 青山貞一郎
 - 岸高 才喜



朝川 虎彦 山中 政吉 菅蒲 公義 明永卯之吉
三善 威

三ヶ年皆勤者

平井 貫吉 吉岡 三郎 市丸 有二 小本 江笠
藤本 二郎 山田 勝清

尙神江師範より左の通り級の発表があつて散會したのは六時頃であつた。(信雄記)

一級

小本 江笠 橋村 謙二 吉岡 三郎 徳重 英助
佐々木義久 松井小太郎 朝川 虎彦 龜谷 軍平
佐々木榮徳 山崎 計介 中山 節耶 三輪 俊夫
荒牧 昌之

二級

塚本 省三 島 一郎 神田 重藏 後藤 文雄
崎田 義夫 新居源太郎 泰 誠之 三好 貞藏

弓術部報

京都遠征記

行くやらぬの争が長い間續いてやつと行く事に確定したのは十一月の下旬であつた。その間私達は稽古

して居なかつたと云ふ譯ではないがその後於てのその様に猛烈のものではなかつた。私達の十一月下旬からの稽古は實に門外漢には解し得られない程猛烈でした従つてつらい思も幾度か數知れず押手の皮膚の堅くなるまで一分の時間も過すまいとあせつた。そして最早が見えないまでに鍛へ鍛へて歸つて行く。電燈がついて月が冴わる頃毎日私達は一つの力強いツウエケをいだいてグタ／＼になつた身体をひきづり歸つて行く。

そこに私達は一種の樂を見出して居た。試験の事なんかは少なくともその時のみは頭になかつた。三十四十のレコードを得ては共に喜び二十五六のレコードを示しては共に悲しんだ。昨日よりも今日一本でもレコードが増すと云て事はこの上もない私達の喜びであつた。

かうして鍛へて居る中に私達の腕はメキ／＼上達して來た。私達は非常に喜んだ集會場で「あたり温範」をすゝつた事も幾度かしれぬ。これならばと云ふ確信がそろ／＼ついて來た時は最早一學期試験も明日明後日からと云ふ間際に切迫して居た。これで假令

暫時でも全然やめてしまうのは甚だおしい様な氣がしたけれども脊に腹はかへられず二日を休む事にした。珍らしくもないが時日のたつは早いものかうした中に試験もすんで愈々廿四日の午前十時の汽車で出發する事になつた。その夜私の夢は京都へ走つて居た私ばかりではない皆んなも全じ妄想にふけつて居たと云ふ。京都で勝つた夢「アターリ」の聲は座の奥に響いて行く様な氣がしてならなかつた。明くれば廿四日急ぎ足に上熊本驛へつくところには最早藤野君が來て居た。今朝六時に行く筈の柔道部とも一緒になつた。驛まで遠路をわざ／＼御見送り下さつた鬚髯部員岡村君や庭球部員緒方君に一同より厚く感謝してやまぬ。

博多では弓矢ひつ下げた武者姿の中原君を加へて弓術部も氣をはいた。書きおとして濟まぬが上熊本驛から乗るのは私と藤野君と二人きり三淵君は熊本驛から中原君は博多堤君は三ノ宮から一緒になる約束であつた。

下關では二時間と待たされた上弓だけは列車内に持ち入つてはならぬと云つて來た。而し兩方でどやかく

云ふ中に時間迫つてかまはず上車してしまつた汽車は直に出た。但し弓を入れぬと云つたのは下關ばかり他の驛ではなんとも云はなかつた。

列車内では梅田驛まで「カバチウシヤ」で大賑ひをした。三ノ宮からは堤君が一緒になつた堤君の姉さんと可愛い坊ちゃんが見送りに來て居られた。

京都驛に着いて私達の先輩町野さんに案内されて聖護院町の宿に落ついた時に午後四時。宿は町野さんの下宿で大阪高商の弓術部選手も同宿となつた。夕食後大阪高商の選手と巻藁をこさへてお湯に行つた二日の疲れの爲めにその夜は早くねた。

廿六日八時起床食後柴田勘十郎氏の道場で大阪高商とミックスの稽古をした各選士の意氣あたるべからず。午後六時大學内生徒集會場で各弓術部選手の會合があつた。この席上では監督田島博士及審判長藤部博士の談話があつて規定に對する改正案を議する事になつた。遂に三日間の中數の合計に依る事となつたのである。

この時四高の所謂四高魂の第一矢は放たれた然も弓弦高く……「四高は第一勝者の地位を以つて他校と

對する約束だから以前の通りの規定にしたい」とサ
以前の規定とはね柔道や擊劍の様に二勝者を以つて
優勝仕合をさせる事になつて居たので組合せの結果
四高が餘る様になつたそれで止むを得ず第一勝者に
あたる筈になつて居たのだそれが愛知醫專が加つて
その心配がない様になつてゐるのを彼等は知らないで
この權利？を主張するのである。卑劣ではないか戰
はずして第一勝者の地位を抽籤で得たからとてそれ
を得々としてよくも云はれた事。

廿七日 五高對三高

三高は少くとも私達の一番強敵と考へて居た學校で
ある。三高は毎日大學の道場で稽古して居て腕もメ
キ／＼上達してゐるとは町野さんのお手紙によつて
早くから知つて居た。而し私達の面にはやがて會心
の笑と變すべき自信の色が溢れて居た。雨か！風か
！眞の汝等の勝負の分岐點は來れりやれ！やれ！そ
うして彼等を一砥めに砥めつくせよ……私達の耳
に私達の胸にこんな言葉がピンと響いてくる。
午前九時男山八幡のお守に一禮し町野さんのお心づ
くしの勝栗昆布に初陣を祈つて下宿を繰り出した。

それからやがてしてアイン、ツライ、ドライ、ワア
ツの勇ましい聲が大學の門前に響いて整々堂々熱盛
の再生三淵君を最先きに愈々五高魂を發揮した。午
前十一時私達の順番が來た三高と共に手を取りあつ
て戰場にたつた時この時私達の一大打撃は下つたそ
れは私達の折角勇み立つた元氣を最二つに引きさい
てしまつた。それは戰場に立つてから中止されて食
後と云ふ事になつたではないか何と云ふ殘酷だらう
人は皆ハズミの動物であることに弓術の如きはハズ
ミの氣持が一番影響するこのハズミを折られた私達
はもう氣がぬけてしまつた。氣流の變化のひどい午
後一時愈々始つた併し乍ら午前のような元氣はなしそ
の上旋風の爲めに矢は的際になつてすん／＼落る。
思つたよりもずつと少ない十二對九で私達の優勢に
終つた。この日私達は非常な不利の時にあつた事は
皆も認めた所であつた。

廿八日、大雪である今日の私達の仕合は午后なので
朝の中柴田氏の道場へ行く事にした。こんな大雪に
は未だ一度もやつた事がないので眼まぶしいのに困
つてしまつた。道場には柴田さんが來て居てどうか

一パイと出されたのは濃い茶にあらすして有難い否
苦い酒であつた。愈々午後二時七高對五高の仕合は
始まつた。七高は昨日の最勇者である。何糞ツやつ
つける……アターリ、アターリツの嬉しい聲は耳
に響く而し初めての雪の日具合がわるい遂に十八對
十八の同點。この日柔道部から管君廣辻君がお見舞
下すつた共に厚くお禮申上げます。夜はこつちから
中原君と私と遊びに行つた。九時臥床。明日の勝夢
廿九日第一番目に愛知醫專との仕合これもなんなく
吾が優勢に歸した。然し乍ら第一日目の打撃は遂に
私達を敗殘者になしてしまつた。私達一同は泣いた
泣くまいとつとめたけれど涙はわけもなく出る胸は
つまる噓敗殘者の悲みを私は初めて感じた。泣いて
泣いて涙がつきて死んだらいゝとしみく思つた。
遂に優勝弓は四高に取られた。この四高と審判の方
との一點つけそこなつたいやつつけそこなはぬの争が
あつて私達一同をして厭忌せしめたが敗けおしみに
とられる恐があるから云はぬ。

優勝弓われはながめて云ひしれず

弓手しむればいたかりけりな

優勝弓人に取られしゑり人の

こゝろ思ひて涙浮びぬ

敗られてみんなみの子は椅子に伏し

學びや思ひさめくゝと泣く

最後に校長初め部長の先生方が京都まで出張なさつ
て意氣を鼓舞せられる四高の選手を羨望すると共に
彼等を開眼せしむべく本年度の諸君の努力を希うて
止まぬ。(些丹涙の手記より)

遠的會發會

抑も遠的は矢頃の三十間より五十間百間等の距離を
以つて原野にて行ひその豪壯眞に古の戦ひを偲ばし
むるものあり。

龍南昔より此擧なきにあらずされど近年顧るもの全
くなし之れ元より吾人の力足らざる所にして又弓矢
取る人の歎ずる所なりき。

然るに不肖吾人等京都遠征を爲すに及び切にその必
要を感じ同好の士を相ひ諮ひ遠失を調へ破れたる
を綴りて腕を摩しつゝその機を待つ程に霞たばしる
寒稽古も終りたれば第二千五百七十七回の紀元節の

佳辰を卜して武夫原頭に於て寒稽古射納を兼ね再興最初の會を舉行せり。

次に同好の士の芳名を掲げ永久に記念せん。

松田、藤野、中原、堤、横山、下田、酒井、荒井、滋賀、西村、後藤、小島、原、迫、島野、瀬戸、原田、三淵、岡本、

進級者

二級

藤野 愛泉 中原 英 岡本 忠臣

三級

堤 正元 三淵 勝 横山 通幹 佐々木義之
松田 彰 佐々 弘雄 下田 吉人 酒井 由夫
後藤 管野 嘉多岡 武

四級

荒井 迫 原 木田 井田 河野

五級

八木 鹽谷 原田 岡本 野口 西村 小島

六級

瀬戸 三村 河野

熊本學生大會第五回

一月廿八日高工にて開催されたり參加學校は高工、醫專、藥專、五高にして勝は高工に譲られたるも新進の猛者酒井君をして一等たらしめたるは吾が部の痛快を叫びし所なりき。

京都遠征の勇士藤野、中原、三淵、堤、岡本、既に老いたり。されど新進氣鋭の多士濟々として吾が校にあるを喜びて止まず。

當時の出陣者は以上五名の外酒井、下田、横山、後藤、鹽谷、松田、三淵君の十二名なりき。

寒稽古

一月十九日より二月二日まで午後三時より午後五時まで寒稽古を催せり。皆勤者氏名次の如し。

上野君 鹽谷君 滋賀君 小島君 荒井君 瀬戸君
下田君 酒井君 横山君 三淵君 堤君 井田君
中原君 藤野君 岡本君